しない奥さんを無理に引っ張って、次の移動場所へ行きましたが、赤ん坊を背負い、子供の手を引いての逃走に、身体は綿のようになってしまいました。

翌年五月末引揚げの通知を貰いました。引き揚げるため、泉さんと二人で、埋めた所へ行きましたが、お骨はなく、赤い綿入れのチャンチャンコが泥にまみれて、散らばっていました。校庭の荒地に吾亦紅の赤紫の花が風にゆれてひとしお悲しさをさそう日でした。

昭和二十一年五月三十日、佐世保港着。

地獄の旷野

福岡県　大　渕　チヒロ

今頃、満州開拓などと申し上げても、当事者以外の人には、百科辞典でも調べないとご理解できないと思います。

日本の敗戦により愛児を失い、命からがら悲しくつらかった満州引揚げの傷跡がいつの間にか忘却の彼方へと消え去るを愁い、真実の姿の一端でも伝えたい、せつない願いをこめてペンをとることにしました。

昭和の初期、日本農民を百万戸、五百万人を満州大陸に開拓者として送り出す、移民運動がありました。それが終戦の時には、二十七万人の開拓者を送り出していたが、敗戦で死亡八万人を越した。開拓民が如何に悪条件におかれたか、世界史に類のない農民哀史であると、吉崎千秋氏（元拓務省技師、開拓団指導員）が述べておられる。

私は、女学校卒業後間もなく、満州大陸に渡った開拓花嫁の一人ですが、引揚後、育児、家事、農業の多忙な毎日の中で、引揚メモを、主人が病床に臥した機会に校正して下さいました。昭和五十三年、孫の節句の日です。

私達の開拓地は、吉林省舒蘭県の開原城子河で、満州の京とも言われた吉林に近い開拓地でありました。

主人は、昭和十九年一月に平川明さんと一緒に召集になって、遠いフィリピンの戦野におりました。その後、次々と召集され、私達の部落は、十一戸で、子供

と女ばかりになりました。これからどうして生きて行くか、神様や佛様に祈らずにいられませんでした。その直後、いたらない二十六歳でしたが、部落長になりました。

これまで役場から、日本は不敗の国、神州不滅、神風の吹く国とか、日ソ不可侵条約を結んでいるので、日ソ戦争などあるわけが無いので開拓に励み、銃後の守りをしっかりするようにとの達示でありました。

八月九日、突然ソ連機が飛んできて爆撃し始めました。ソ連参戦、大変なことになった。

婦女子ばかりの私達、どうしたらよいか、迷うばかりでした。たちまち現地人の様子が変ってきました。

八月十五日、敗戦の知らせが役場からあった。ああどうなるか、どうしたらよいか、故郷の母の顔、戦地の夫、抱いている幼児、血の涙がにじみ出しました。

もう、部落全体が動揺の様子がありありと見えてきました私はこれから先のことを思い、先ず食糧の準備にとりかゝりました。苦悩で沈みがちになっている奥様達の協力を得て、炒米、炒豆を沢山つくりました。

今まで平穏だった現地人が出没し騒ぎはじめ、お前達は日本に帰れないぞ、殺されるんだ、との罵声をあびせる、奥さんの中から、どうせ殺されるなら、暴行凌辱されないうちに日本女性らしく自決して散りましょう。というと、賛成する奥さんも出てきました。私は生きられるだけ生き、自決するなんて、どうしてこの子を母の手で殺せるだろうと、私達は手をとり合って泣き崩れるばかりでした。

私はこの部落の責任者です。八月十九日に役場から一戸当り三千円渡すとの連絡があったので、子供を隣家の上野さんにお願いし、黒宮副部落長と二人で不穏な情勢の中五キロの道を歩いて行ったところ、驚いたことには、団長（村長）は、この準備した公金を持って夜逃げされたと聞いて、この最高責任者の団長は、男か、人間か、日本人か、と憤怒やりかたなくも情けなくなりました。私達は残り金を三百円づつ分け合って帰って来ましたところ、現地住民がワイワイ叫び、騒ぎ、今にも掠奪しようとしている。これは大変なことになると直感し、私は咄嗟に、家財道具、衣服、全

部さし上げる、と叫びました。
騒いでいた人達は土足のまま飛び込み、大声を出し奪い合い、手に手に持って散って行きました。
この心づかいで少しでも現地人が平穏になってくれればと祈り、がらんとなった家の中で、幼い娘を抱きしめました。
錦紗の着物、主人の和服など、どうしたことか欲しいとも、哀しい気持は湧いてきませんでした。その夜は、子供達を真中にまんじりともせず恐怖におびえながら生きた心地もせず一夜を明かしました。
翌二十日、治安情勢が緊迫したので家族一同、役場に集合の電話をうけ、小雨の降る中を出発しました。いざ住みなれた小さいわが家ではあるが、庭の草や木まで離別の情がこみ上げてきました。大きなヒマワリの黄色の花が咲いておりました。
私は白鉢巻、腰には主人の形見の日本刀、背には三歳の娘とリュック、小銃と四十五発の弾丸を持って途中を警戒しながら集合地に向かいました。
役場に着きますと、昨日の十九日の夜は数か所部落が現地人の集団襲撃にあい、掠奪暴行殺人。
惨々たる地獄事件が起きたと云う、ぞっとしました。ところが神ならぬ、私に対して、あなたの部落の人達が自決する、と言って出て行かれたと知らせてくれた。さあ大変なことになった、私は狂気のようになって探し走りまわった。事務所に引返して応援をたのみ草藪の中まで奥さん、奥さんと叫び、よろめきたおれ、走り続けて家の中に飛びこんだところ、血の海、吐く人、下痢する人、呻く人、泣く人、子供は冷たくなっている。柿本の奥さんは子供の傍で心臓を刺し、鼓動する度に血液が飛び出していました。八重樫の奥さんは青酸カリで死んでいました。微かな声で呻かれ苦しみながら、済まない、済まない、と言いながら死んでゆかれた。
あれほど自重し、自決は思い留まるようにお願いしていたのに、私の心が通じなかったのは残念でならなかった。
役場では、前日の事件で死亡された死体もそのままでした。みんなの協力で埋葬の穴を現地人のお手伝い

により掘って戴きました。

鏡泊郷の方々の遺体運びは私一人でしました。線香の煙は今まで、耕してきた開拓地へ淡くたなびいて消えてゆくのをながめて、私の涙はとどまりませんでした。

そののち、背の高い上品な婦人が幼な子を背に、両手に子供を連れて大変疲れた姿で訪ねて来られたが、主人をよく存じておられた。

第四次、城子河開拓団長、佐藤修先生の奥さんでした。

その後、ソ連兵が来ると言うので、佐藤夫人と互いに手を取りあい、丸坊主になり、死ぬ時は一緒にと誓った。三歳になる娘が青白くなった坊主頭を小さな手でなで廻し、お母さん、髪は、と言った時は、言葉は出ませんでした。

ソ連兵により武装解除となり、兵器は全て取り上げられ、私は、大切にしていた日本刀、主人の父親の形見の懐中時計もとりあげられました。

十月初旬、開原城子河開拓団を引揚げることとなった。墳墓の地と決めた新天地の広野と永遠の別れの情がこみあげてきました。私達に埋葬の穴を掘ってくれた人、先日私宅から持ち運んだ衣服を、寒さに向かう時だから、と言って再び返してくれた現地の人々を一生忘れることはない。人間愛、この暖かい心は世界のどこでも同じと思います。これは長く子孫に伝えて、日中友好のささやかな絆にしたいものと思います。

私達は馬車に老人と子供を乗せ、屠殺場に連れてゆかれる子羊のように、ソ連兵に付添われて開拓地を後に歩き続けました。

途中、三人の現地人が、ソ連兵に銃殺されました。何の理由かわからない、これが戦争なのかと自問自答していました。

ようやく開原駅について乗車したが、北進か南進か不安でした。車中に二泊してハルピンに着き、花園小学校跡の収容所に落ちつきました。

全国境線から集まった避難民の非情は筆舌につくせるものではありません。奥地から、野越え、山越え、そのうち疲れ果てて死ぬ。山中に置き去りにしてきた。

現地人の妾となった人、子供を現地人に預けたり、与えたり、余りにも、むごい惨状であります。身近な私達の中からも死んで逝かれました。

渡辺嶺雄さんの奥さんは敗戦前に二人の男の子をおいて病気で亡くなられたので、後妻を郷里から娶られ、その母親が娘がどんな所にいるのかと同伴し渡満されました。帰国の機会を失い、敗戦で日本に帰ることができません。花嫁さんは、お腹に子供さんができておられるようでした。そのうち幸いにもご主人が、敗戦後復員帰国され、ハルピンでは五人家族でした。

男の子供さん二人を現地人に委託されたようでした。三人になりましたが、三人共前後して、発病され死亡されました。一家全滅、お気の毒で申し上げる言葉もありませんでした。

全く地獄そのものでした。

戦争は悪魔、人間を吸血鬼にかり立てて神も佛も無い世の中にしてしまうものだ。ああ人間が恐ろしい。

私の引揚労苦の綴りはしめくくりますが、ハルピン、新京、奉天そしてコロ島から乗船へ、日本の舞鶴へと、幾多の困難をのりこえ、のりこえてきたが涙で頬を濡らすばかりでした。

瞼には逝った愛しい子供、遠いフィリピンの夫、そして北斗七星またたく北の空をじっと見つめました。そこには満州が…。

ああ、私は生きていた。祖国幾山河。昭和二十一年六月二十六日に生還し引揚げたのである。

惨苦！満州鏡泊湖より幾千里

長崎県　下田　裕一郎

私は昭和十三年五月、茨城県内原で満州開拓者青少年義勇軍訓練所で基礎訓練修了して渡満、更に寧安訓練所の訓練を修了し、鏡泊湖開拓団に入植し村づくりに邁進していた最中の昭和十八年五月、現役兵として入隊し、直ちに河北、山東省方面に転戦を繰り返していたが、鏡泊湖の部隊に転属して、間もなく敗戦をむかえ、世の奇遇に驚いた。